茨城県立図書館ボランティア会通信紙

カガヤキ

暫定的補足表題「ウオランタス」
ラテン語でボランティアの意

公園「こどもの国」の新緑(千波湖畔)

No.64(2022.5.15 刊行)、広報委員会編集
茨城県立図書館発行
禁複写転載©広報委員会

読者投稿

ボランティア広場的機能へ

ボランティア　A

(以下の文章は、広報グループが、ボランティア Aに対する聞き取り調査を基に、まとめた。)

私は、発行当初には、通信紙にまったく関心がなかったが、No.25 以降の編集方針と記載内容に、それまでとは、大きく異なることに気づき、毎号、熟読吟味している。

通信紙の位置づけや内容については、ボランティアの数ほど存在するかもしれず、以下の感想は、単なるひとりのボランティの視点にすぎない。

通信紙 No.25 からの利点は、

・文章表現が吟味されている(文章論)、
・文章展開の筋道が分かりやすくしてある(論理展開)、
・常にオリジナリティがある(独創性)、
・常にボランティアの特性分析をしている(社会科学的手法)、
・各ボランティアグループの「年次報告」により、ボランティアの活動内容と成果が良く分かるようになっている(社会的資料価値)、
・読みやすく理解しやすい短い研究論文が掲載されている(県立図書館と同ボランティアの社会的存在価値向上)、

である。

それらに対し、懸念すべきことが、まったくないわけではなく、あえて、理想論を掲げれば、

・広報グループは、常に、原稿入手に苦労しているとは言え、偏りの改善に努め、各ボランティアへの聞き取り調査などにより、原稿をまとめ、ボランティア全員が、意思表示でき、全員が参加できるようにしてほしい、
・通信紙の紙面は、誰でも、いつでも、何でも書けるボランティアの「自由の広場的機能」を果たせるようにしてほしい、
・たとえ、下手な、俳句でも、和歌でもエッセーでも、短編小説でも、掲載してほしい、

などである。

梅原猛『三人の祖師』の感想　総論

宗教研究者（曹洞宗雲水）
桜井　淳

はじめに

梅原猛（哲学者）は、『三人の祖師』（梅原猛著作集 9、小学館(2002)）において、日本の代表的な創宗者として、最澄(767-822)、空海(774-835)、親鸞(1173-1262)の三人を採り挙げている。そのページ数の配分において、最澄に約 150 ページ、空海に約 100 ページ、親鸞に約 340 ページと、前二者と 2-3 倍も差があり、違和感を覚えるほどである。以下、異常なほど親鸞を詳述する梅原の意図が何であるのか、解読したい。

なぜ三人なのか

歴史的に見れば、日本の代表的な仏教宗派は、以下のとおりである。

・南都六宗(奈良時代)
・天台宗(最澄、平安時代、万人成仏)
・真言宗(空海、平安時代、即心成仏)
・融通念仏宗(良忍、平安時代、他力往生)
・浄土宗(法然、鎌倉時代、他力宗)
・臨在宗(栄西、鎌倉時代、初の禅思想)
・浄土真宗宗(親鸞、鎌倉時代、絶対他力)
・曹洞宗(道元、鎌倉時代、只管打坐)
・日蓮宗(日蓮、鎌倉時代、法華経至上)
・時宗(一遍、鎌倉時代、踊り念仏)
・黄檗宗(隠元、江戸時代、念仏禅)

この中から三人の祖師を選択するとすれば、革新性か社会的貢献かなど、判断基準を明確にしておかねばならない。私は、曹洞宗雲水であるため、仏教の原理原則を厳守し、なおかつ、武家など特権階級ではなく、民衆のための仏教に徹した道元を優先したい。梅原は、なぜ、社会的影響力の大きい日蓮を除いたのか？

『三人の祖師』(梅原猛著作集 9、小学館(2002)

なぜ親鸞なのか

梅原は、「親鸞は日本人の精神的「故郷」」(353-370 ページ)と、異常に高く位置づけている。

親鸞の浄土真宗は、まったくゼロから誕生したのではなく、法然の浄土宗とその哲学の「他力」を徹底継承した「絶対他力」の世界である。

親鸞は、異常な言動をする祖師であり、当時、表面的には、禁止されていた「肉食妻帯」の実施と言う革新性のため、社会秩序を重視する権力者や宗教関係者の反発を

招き、29歳頃、京都から越後へ、流刑された(当時、隠れて、「肉食妻帯」していた宗教家は、存在していたものの、親鸞は、彼らに都合悪い裏切り者とされた)。

梅原は、親鸞について、340ページも記したが、弟子の唯円によって語られた親鸞の言葉である『歎異抄』(異を歎(なげ)いた書)については、そのうちの200ページも費やしている。梅原は、親鸞の革新性と「絶対他力」を高く位置づけたため、三人の祖師の一人として、さらに、他の二人より2-3倍も多く記したのであろう。

『歎異抄』の正しい解釈

『歎異抄』は、梅原が、殊の外、詳述するほど、特別な内容なのだろうか?

『歎異抄』は、十八条からなり、もっとも有名な記述部分は、第三条「善人なをもて往生をとぐ、いわんや悪人をや。・・・」(647ページ)である。その意味は、表面的な解釈では、理解できず、浄土真宗における「絶対他力」の宗教学的意味を深く理解していないと、分からない。

梅原は次のように訳している。

「善人ですら極楽浄土へ行くことができる、まして悪人は、極楽浄土へ行くのは当然ではないか、私はそう思いますが、世間の人は常にその反対のことをいいます。悪人ですら極楽へ行くことができる、まして善人は、極楽へ行くのは当然ではないかと。

世間の人のいう方が一応理屈が通っているように見えますが、この説は、本願他力の教えの趣旨に反しています。と申しますのは、みずから善を励み、自分のつくった善によって極楽浄土しようとする人は、おのれの善に誇って、阿弥陀さまにひたすらおすがりしようとする心が欠けていますので、そういう自力の心がある間は、自力の心を捨ててただ阿弥陀さまの名を呼べば救ってやろうとおっしゃった、阿弥陀さまの救済の本来の対象ではないのであります。しかし、そういう人といえども、自力の心を改めて、もっぱら他力、すなわち阿弥陀さまのお力におすがりすれば、正真正銘の極楽浄土へ行くことができます。・・・自分の中に何らの善も見出さない、ひたすら他力をおたのみするわれらのごとき悪人のほうが、かえってこの救済にあずかるのに最もふさわしい人間なのであります。

だから、善人ですら極楽へ行くことができる、まして悪人は極楽へ行くのは当然ではないかと、なくなった法然聖人か仰せられたのも、深い理由があってのことであります」(647-648ページ)。

私は、宗教における信仰とは、すべて、そのようなことであると思う。親鸞の教えは、「絶対他力」だからこそ、自力のない悪人に対し、信仰をとおして、救済しなければならないと、解釈すべきなのである。

結びに代えて

梅原の三人の祖師の選択は、自身の哲学優先の結果であり、宗教の客観的価値による評価とは、異なる。私が、祖師を採り挙げるとすれば、宗教の客観的価値を優先し、平安時代の最澄と空海、鎌倉時代の法然と栄西と親鸞と道元と日蓮の計七人とし、学術書にまとめるとするならば、同ページ数を割り当てるであろう。

編集後記

今回は、読者からのふたつの提言内容、すなわち、「聞き取り調査」と「自由な広場的機能」について、考えてみます。

「聞き取り調査」についての検討

どうしても良い原稿が入手できない場合の最後の手段として考えられることは、対象者に対し、社会科学研究のひとつの手法である「聞き取り調査」を実施し、自身でまとめ、編集することですが、それには、利点と欠点があり、利点として挙げられるのは、編集者の知識と論理と編集能力によっては、目的とする高い水準の原稿が作成できることであり、欠点として挙げられるは、対象者の個性や独特の表現(よく言えばオリジナリティ、普通に言えばクセ)を生かせないこと、視点を変え、編集者の立場からすれば、負担が大きくなることです。そのため、広報グループのように最少人数で活動する場合には、作業量が多くなるため、単純に、「聞き取り調査」に完全移行することができません。部分的移行ならば可能です。

私の経験から言えることは、月刊誌の数ページから十数ページの記事(良く言えば論文、普通に言えばエッセー)が、読みやすく、全体のまとめ方や表現が良く合っているのは、すべての記事がそうとは言えませんが、編集者が、対象者に対し、「聞き取り調査」を実施し、まとめているためです。そのようなやり方は、月刊誌の記事のみならず、対象者への著書依頼に対しても実施されており、著者執筆による「書下ろし」に対し、「聞き取り調査」の場合には、著者による「しゃべり下し」となり、6時間の「しゃべり下し」により、印刷時240ページの単行本になります。通信紙の記事としては、対象者に対し、10分程度の「聞き取り調査」により(メールのやり取りやzoomによるリモート取材も採用したい)、1ページの記事をまとめることはできますので、今年度の課題として、積極的に進めてみます。

「自由な広場的機能」についての検討

いまの通信紙の限界を超えるには、いまの水準を維持しつつ、広報グループの作業量は、増加するものの、ボランティアに対し、誰でも自由に参加して表現できる「自由な広場的機能」を備えることも、具体的に検討してみる価値があると思いますが、利点として挙げられるのは、全員参加による公正性の確保、欠点して挙げられるのは、平均化による論点の希薄化であり、具体化するとすれば、対象者に対し、「聞き取り調査」を実施し(たとえば、俳句や和歌や短編小説は、対象外)、編集者がまとめ、試行錯誤しながら、全体の論理構成を整えるようにすることですが、今年度の課題として、積極的に進めてみます。

磯崎新(世界的建築家)は、水戸芸術館(世界でも稀な音楽施設と演劇施設と絵画施設の一体化、水戸芸術館と茨城県近代美術館の相互比較をした通信紙No.51参照)の設計において、施設配置の中心部に、大きな広場を設け、各種の催物に誰でも参加しやすいように、南側境界には、バリアーとなる物を設けませんでしたが(No.51参照)、考え方は、通信紙でも同じであり、誰でも参加しやすい条件を整えることです。

桜井　淳